

論文審査の結果の要旨および担当者

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

氏 名 趙 歆

論 文 題 目

「非物質文化遺産」の保護における協働関係
－中国甘肅省の事例を通じて

論文審査担当者

主 査

	名古屋大学	教授	内田綾子
委員	名古屋大学	准教授	笠井直美
委員	名古屋大学	准教授	坂部晶子
委員	名古屋大学	教授	木下 徹

論文審査の結果の要旨

1. 本論文の構成と概要

中国では、2004年にユネスコの「無形文化遺産の保護に関する条約」に加盟後、2011年から「非物質文化遺産法」を施行し、「非物質文化遺産」（無形文化遺産の中国語訳）の調査や保護を進めてきた。今日までに、数多くの非物質文化遺産が登録され、各地で様々な保護事業が行われている。それとともに、非物質文化遺産に関する研究も、民俗学や文化人類学などの分野で注目されるようになってきた。これまでの先行研究は、中国における非物質文化遺産保護の取り組みを明らかにする一方で、その制度的・実践的課題を指摘してきた。しかしながら、非物質文化遺産の具体的事例を取り上げて、現地での保護の状況を詳細に検討した研究はまだ少ない。また、その実践に見合うような理論的考察も十分になされてこなかった。

本論文は、中国甘粛省における3つの非物質文化遺産に焦点をあて、それらがどのように認定・保護されてきたのか、そこにはいかなる可能性と課題が存在するのかを検証している。甘粛省は中国の他地域に比べて経済発展が遅れているが、歴史的な有形・無形の文化遺産が数多く存在する。とくに、(1)敦煌市の壁画模写と彫像の技法（伝統美術/工芸）、(2)張掖市の「河西宝卷」（口承文学）、(3)西和県の「乞巧節」（年中行事/民間信仰）の事例に注目し、省レベルで認定された(1)と国レベルで認定された(2)と(3)の非物質文化遺産について、保護の現状と特徴を明らかにしている。研究方法としては、近年の民俗学等における非物質文化遺産に関する研究アプローチと視点を検討したうえで、現地の甘粛省において上記の非物質文化遺産をめぐる各関係者（伝承人、現地の住民・知識人、保護事業の担当官等）に聞き取りを行った。さらに文化館等の関連施設見学や非物質文化遺産に関するイベントの参与観察を重ね、そこで得た記録を基に考察している。そして、非物質文化遺産の保護における課題を明らかにするとともに、現地の伝承人や住民、知識人、行政、研究者など各関係者の協働（collaboration）のあり方に注目している。

本論文は序章、第1章から第5章、そして終章より構成されている。

序章では中国における非物質文化遺産の背景と研究動向を示し、本論文の研究目的と対象、方法論、論文全体の構成を説明している。

第1章では、ユネスコの「世界遺産」と「無形文化遺産」に関する歴史を概観し、「無形文化遺産」が中国で受容された経緯、そして「無形文化遺産」の概念としての非物質文化遺産の登場について検討している。2003年のユネスコ無形文化遺産保護条約は中国社会に圧倒的な影響をもたらし、歴史的に否定的イメージを持った旧道德・旧文化、伝統宗教、民間信仰が非物質文化遺産として再認識されることとなった。また、非物質文化遺産という概念は、従来の中国固有の文物という概念とは全く異なっていた。また本章の最後では、甘粛省における非物質文化遺産の全体像を把握し、その特徴をまとめている。

第2章は、中国の非物質文化遺産保護をめぐる課題と学術研究の関わり方を先行研究とともに論じている。まず、中国の法律における各レベルの非物質文化遺産と「伝承人」の認定基準、そして保護手法に見られる問題などを説明している。また近年、登場した「公共民俗学」とそ

論文審査の結果の要旨

の理念に近い「実践民俗学」のように、現代の人文・社会科学研究では「公共」に注目する分野が増えており、そこでは「協働」の概念が重要であることを指摘している。そして、非物質文化遺産の保護に民俗学者などの研究者が参加する可能性を示した。そのうえで、甘粛省の非物質文化遺産に関する研究状況を説明している。

第3章から第5章は、甘粛省の非物質文化遺産の3つの事例に関する現地調査の結果の分析と考察である。まず、第3章は、甘粛省レベルの非物質文化遺産である敦煌市の壁画模写と彫像という2つの技法に焦点をあて、双方の歴史的背景と保護の現状を論じている。これらはもともと敦煌研究院という現地の機関で発展したが、技法の担い手の移動や政策の実施によって、非物質文化遺産としての認定や保護が偏ってきた。また、甘粛省では財政的問題もあって、省レベルの非物質文化遺産に対する補助金はなく、認定や保護事業などの取り組みが遅れている。そのため、非物質文化遺産保護にむけた伝承人、現地住民、行政、研究者など各関係者の協働も十分に発達していないことを説明している。

第4章は、甘粛省張掖市における国レベルの非物質文化遺産である「河西宝卷」の現状について考察した。従来、河西宝卷の保護政策は、行政から伝承人にむけた一方的なものになりがちであり、関係者にはその継承にやや悲観的な見方もあった。しかし近年、河西宝卷が省レベルから国レベルの非物質文化遺産に認定され、保護事業では詠唱活動イベントの開催を通じて、政策側と現地の伝承人や地元との関係が改善している。このように保護事業で、伝承人、現地住民、政府、研究者など各関係者の協働が見られ始めたことを明らかにしている。

第5章では、甘粛省西和県の非物質文化遺産である年中行事「乞巧節」の現状が検討されている。従来、政府は国レベルの非物質文化遺産として乞巧節に関する保護事業を活発に行い、西和県各地の乞巧節は恒例の公的イベントになってきた。筆者は三つの村での乞巧節の行事を比較して保護政策の影響を検討し、乞巧節に関わる人々の見解や現在の課題を考察している。行政による監督や介入が強い村もある一方、参加者が比較的自由に行事を行っている村もある。これらを通じて、非物質文化遺産保護における各関係者の相互バランスの上に成り立つ協働と現地住民のイニシアチブの重要性を論じている。

終章では、第1章から第5章で検討した甘粛省の非物質文化遺産保護の現状を整理し、その課題についてまとめている。甘粛省では、非物質文化遺産保護に対する補助金の多くを中央政府に依存しており、省レベル以下の非物質文化遺産にはほぼ補助金が見つからない。また一部の保護事業には行政の介入が強い傾向にある。そして、いずれの事例でも、非物質文化遺産をめぐる認識と認定の問題、保護手法と研究面で課題があることを指摘している。今後、非物質文化遺産に関する学術研究は、従来のアカデミズムにとらわれずに「公共民俗学」や「実践民俗学」に示された理念に基づいて進めるべきであるとしている。そのうえで、非物質文化遺産の保護には、現地の伝承人や住民、知識人、行政、研究者など各関係者の協働が重要であると結論づけている。

論文審査の結果の要旨

2. 本論文の評価および問題点

本研究は、中国の非物質文化遺産の保護の現状を甘粛省の3つの事例に関する現地調査に基づいて考察し、検証している。非物質文化遺産に関する施設訪問やイベントの参与観察を重ね、現地の伝承人や住民、知識人、行政関係者など、非物質文化遺産をとりまく各関係者に丁寧な聞き取りを行い、それぞれの見解や役割を分析した。これらを通じて、これまで十分に検討されてこなかった甘粛省の非物質文化遺産保護の取り組みと課題を明らかにしたことは高く評価できる。また、非物質文化遺産の保護を公共性の観点からとらえ直し、保護事業を支える各関係者の協働において、民俗学などの学術研究や研究者が果たし得る役割を考察した点にも独自性が見られる。

一方、議論が十分に展開できなかった側面もある。

まず、非物質文化遺産の概念によって、かつて否定的イメージを持った旧道徳・旧文化、伝統宗教、民間信仰等がどのように再認識されてきたのかは、さほど明らかでない。また、非物質文化遺産を保護するうえで各関係者の協働が重要とされているが、保護が行政主導で行われる場合、現地の伝承人や住民の意向がどのように反映され得るのかについては、より具体的な検討が期待される。さらに、今後、民俗学者や文化人類学者などの研究者や学術研究が非物質文化遺産の保護に関わっていく可能性を論じているが、現地の知識人のほか、これらの研究者等にも聞き取りを行った方が望ましかったと思われる。

しかしながら、これらは本論文の価値や独創性をそこねるものでは決してなく、今後の研究課題としてより発展的に考察することが期待できるものである。

3. 評価結果の判定

上記4名の委員からなる審査委員会は、令和元年7月31日、本審査委員会を開催し、博士課程（後期課程）のあるべき水準を満たしている、オリジナルな成果を含んでいることなどを確認・評価した。

よって本論文は博士（学術）の学位に値するものと判断する。